

家のうらからのぼうけん

奄美市立屋仁小学校 二年 弓場 蒼大

ぼくの家のすぐうらは、しげみになっていて、そこには、ぜったいに入っちゃだめだと言われている。しげみには、どくへびの「ハブ」がひそんでいるからだそうだし、でも、ぼくは、かごしまから屋仁にてん校する時にもらった大切なサッカーボールをとるために、かくごをきめてしげみに入った。夕方になり、少しすすしく、うす暗くなっていた。

おそろおそろ何歩かすすむと、ボールはすぐに見つかった。ハブなんていなかった、よかった。そう思ったしゅんかん、ズキンと足がものすごくいたくなった。

「うわああ。」
た、たいへんだ、ハブにかまれちゃった。ぼくは、あわてた。そのうちに頭がくらくらしてきて、まるでジェットコースターにのったみたい、すつと何かにすいこまれていく感じで、たおれこんだ。

目をあけると、サッカーボールが見えた。でもそれは、なんとぼくの体よりずっとずっと大きかった。ぼくの体はハブにかまれたせいで小さくなってしまったようだ。「おや、蒼大じゃないか。」

声が出た方を見上げると、まどににじ色のヤモリがはりついていた。ぼくらかぞくは、「ヤモじいさん」とよんでいる。ぼくたちが、ひっこして来る前からここにすんでいるらしい。

「どうしたんじや、こんなに小さくなって。」
ヤモじいさんは、おどろいていた。ぼくは、ハブにかまれたことをせつめいすると、ヤモじいさんは、こんなことを教えてくれた。

「がもうじん社の森のおくに、くもが月をかくした時だけ、金色に光る実がある。それを食べるともともどもどるじやろう。」

「じゃ、わたしがつれて行ってあげるわ。」

白い羽に線を引いたようなもよう。ああ、ぼくがずつとつかまえたかったイシガケチョウだ。さんねんだなあ。この体じや、むりだ。

「さあ、せ中にのって。」

のつたとたん、チョウは屋仁にふく強い風にとばされるように、空へ上がった。ぼくは、すべりおちそうになつたけれど、羽のりんぷんが、すべりどめになってくれた。なれてくると、チョウのせ中は、とても気もちよかつた。イシガケチョウが、

「ほら、あそこよ。でも、こまつたわ。ハブとマングー스가けんかをしているみたい。」

と言った。ハブとマングースは、

「おれがもらう。」

「なにを。この実は、おれのだ。」

とにらめっこみたいにむきあって、一步もゆずろうとしない。そのむこうの木の上に、お月さまのように光る実がたしかに見えた。チョウからおりて、ぼくは二ひきに言った。

「ぼくも、あの実がほしいんだ。」

二ひきは、

「お前もほしいのか。なら、しょうぶをしよう。しょうぶにかつたものが、光る実をもらうことにしよう。しようぶするものは、お前がきめていいぞ。」

と言ってきた。この二ひきとのしょうぶで、かてるものがあるのだろうか。ぼくは、なやんだ。かくれんぼはすきだけど、この森では、かてそうにない。うんと考えて、

「そうだ、おにごっこにしよう。」

と言った。ぼくは、走りがとくいで、だれにもまけたことがない。でも、二ひきは、いじわるな顔をしながら、

「それじゃ、五十びよういないにおれたちをつかまえてみる。そうしたら実をゆずってやる。」

と言った。

「ええ、いくらなんでもむりだよ。」

二ひきは、目にもとまらぬはやさで、ぼくの前からいなくなつた。どうしよう、これじゃあ、光る実はもらえない。ぼくは、すわりこんでなきそうになった。その時、急に空から声が聞こえた。

「蒼大くん、さあ、行くわよ。」

さっきのイシガケチョウだった。イシガケチョウは、また、屋仁の風につて、あつという間にハブがにげている木の上とマングースが走っている岩のわれ目へ、ぼくをつれていってくれた。ぼくにタッチされた二ひきは、いきを切らしながら、

「ま、まいった。もう、実はいらぬ。」

とそのまま森のおくへとさえた。

「たすけてくれて、ありがとう。」

ぼくは、チョウにおれいを言つて光る実を口に入れた。その実のあじは、あまくてやわらかいバナナのように、口の中でとけていった。

目をあげたら、ぼくは、ベランダにすわっていた。足元には、サッカーボールがあつた。ゆめだったのかもしれないな。

ボールの近くにイシガケチョウが下りてきた。ぼくは、そのチョウをつかまえようとしたけれど、やめた。だつて、こんな小さな声が聞こえたような気がしたんだ。

「蒼大くん、また、かぞくに会えるね。よかつたね。」